

創刊号

発行日 平成14年元旦

曹洞宗 天祐山公田院仁叟寺

山雲水月

発行責任者 仁叟寺住職 渡辺啓司

平成14年

仁叟寺 年間予定表

- 1/1 年頭祈禱
- 1/3~4 年始挨拶
- 2/3 節分会
- 2/15 涅槃会
- 3/18~24 春彼岸
- 3月上旬 大般若会
- 3月中旬 筆供養
- 4/8 花祭り
- 7/12~16 県外檀家棚経
- 8月上旬 子供禪の集い
- 8/13~16 お盆
- 9/20~26 秋彼岸
- 12/8 成道会
- 12/31 除夜祭

平成14年 住職年頭挨拶

謹賀新年

■母は老いて■

たわむれに 母を背負いて その余り 軽きに泣き 三歩あゆまず (石川啄木)

知らなかった…。こんなに母が軽いなんて…。息子は、やがて成人となり 体つきも大きくなってきます。しかし、母に対する想いは、子供の時のままです。

背負って初めて分かりました。重くて歩けないのではありません。息子は成長していく反面、母は老いて小さくなっていました。



そこには、母の苦勞がしみじみと伝わってきます。あまりにも遅すぎた実感に、感極まって歩けないのです。

「生きているうちに親孝行。」生きていくだけで親はありがたいものです。親に感謝。生んでくれて、育てくれた親だもの。お正月、親の手を握って、「長生きしてね！ありがとう！」と恥ずかしがらずに言ってみよう。

親が亡くなっている人は仏壇とお墓で、「おめでとう！今年も家族一同、健康で頑張るよ。」とご挨拶を。

本年5月に龍源寺に於いて弟子・長男龍道の晋山結制式、次男俊司の首座法戦式の一世代の儀式を併せて行います。檀信徒の皆様、格段のご支援・ご協力をお願いいたします。

目次：

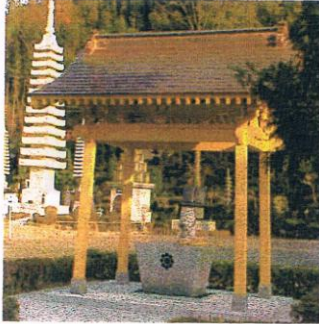
- 新年挨拶
- 水屋の完成
- 梅花講
- 瑞世
- 古文書調査
- 総代人挨拶
- 編集後記

1 年回法要一覧表

一周忌	平成十三年	二十三回忌	昭和五十五年
三回忌	平成十二年	二十七回忌	昭和五十一年
七回忌	平成八年	三十三回忌	昭和四十五年
十三回忌	平成二年	五十回忌	昭和二十八年
十七回忌	昭和六十一年	百回忌	明治三十六年

(以上、各家庭に於いてご確認下さい)

『水屋』が完成



仁叟寺入り口、惣門をくぐったすぐの場所に、『水屋』が完成しました。建物は子持村の宮大工・堂宮入秀社寺建築(株)が行い、国産の青森ヒバが使われています。中に鎮座する龍口は中国・福建省の石が使われ、通常のそれとは異なり、かなり大きな型となっております。

要でありました。

一般的に大きな神社仏閣に参りますと、入り口に水屋があります。本来ならばそこで身を清めるのが通例です。先ず、手を洗い、そして口を濯ぐ。そうすることにより、より清らかな気持ちで参拝して頂くことができます。“心を清める”、それがこの水屋の大きな役目でございます。

仁叟寺入り口
付近に完成した『水屋』

以前から寺に参拝に訪れる方々より、入り口に手や口を清める水屋の設置が求められておりました。また、当寺は吉井町歴史遊歩道の主要コースにも指定されており、水屋の設置は必

参拝者はもとより、檀信徒の皆様もお墓参りや参詣に訪れた際には是非ご利用ください。

ホームページ

仁叟寺HP

昨今のコンピュータ化に伴い、当寺でもホームページを作成いたしました。当寺の沿革をはじめ除夜祭や節分会などの年中行事、他にも本堂や十三重石宝塔といった各建造物の由来、地図などが豊富な写真と共に分かり易く解説しております。

また、当寺についての質問や連絡事項も電子メールを使い行っております。詳細は、仁叟寺

仁叟寺HPが遂に登場！！

是非、ご覧下さい。↓

<http://www7.wind.ne.jp/jinsouji/>

HPをご覧ください。

また、当寺のHPにリンクを貼ったりする方がおられましたら、一度ご連絡を頂きたく思います。

ばいかこう

梅花講講員募集



御詠歌練習の様子

寺において梅花(御詠歌)を習っております。この度、4級詠範師の資格も取得し、仁叟寺において梅花講の申請をいたしました。

梅花講とは御詠歌(御和讃)を鉦や鈴を使いゆったりとおごぞかに唱え上げる、いわばお寺の音楽隊です。

仁叟寺檀信徒会館にて月2~3回程の稽古で会費は月500円を予定しております。なお、第1回目の稽古は、1月11日(金)の午後1時からとなっております。足の悪い方は椅子もございまして、檀信徒の皆様のご参加をお待ちしております。

住職の妻・渡辺恵津子が5年前より、吉井町小暮の全林

すいせ

弟子龍道 兩本山へ瑞世拝登



だいそどう
大本山總持寺大祖堂
において瑞世の拝登を
行う弟子・龍道(中央)

去る12/12に福井県永平寺で、12/14には、神奈川県總持寺の兩大本山において、弟子の長男・龍道の瑞世の儀が厳肅に営まれました。

瑞世とは、曹洞宗の兩大本山に上り高祖承陽大師(道元禪師)、太祖常済大師(瑩山禪師)に礼拝し一夜住職の儀式を修行することを言います。これにより、今までは黒いお袈裟でしたが、色の付いたお袈裟を着用することが許されます。曹洞宗が開かれた鎌倉時

代より多少形式は変わりますが、脈々と伝わる宗門の大切な儀礼であります。

また、瑞世拝登の際には、龍道のどうあんご同安居(修行時代の同期)も駆け付けて下さいました。永平寺では福島県郡山市の勝音寺・瀧澤勝俊師、總持寺では同県いわき市の龍門寺・光英覚法師、新潟県小出町の林泉庵・尾山晋祐師です。それぞれにこの場を借り、厚く御礼を申し上げます。

弟子俊司 總持寺修行中

弟子の次男・俊司が大本山總持寺で2年目の修行に励んでいます。俊司は駒澤大学仏教学部禪学科を休学しての、本山での修行生活でございます。今年中には同大学への復学を考えているようです。

俊司は現在、總持寺の受付—
しかりょう ちやじゆう
知客寮という部署にいて、茶頭
けんたいほうかんせつきやく
兼待鳳館接客という配役を頂いており

ます。この寮では主に本山に来られる御寺院さんや檀信徒の皆様をはじめとする信者の方々の受付や接待を司っております。文字通り大本山總持寺の“顔”といったところではないでしょうか。

もしも、横浜方面へ行く機会がありましたら、是非、大本山總持寺まで足を運んでみてください。



總持寺三松閣前にて

古文書調査



外園早大教授・藤
木立教大名譽教授
らを招いて行われ
た古文書調査

去る8月末に弟子・龍道の大
学時代の恩師・外園豊基早稲
田大学教育学部教授(日本中
世史)が、仁叟寺古文書の調
査に来寺されました。他にも、
日本中世史学の大家でもある

ふじきひさし
藤木久志立教大学名誉教授も同行し、3日間
に亘る調査を行いました。

仁叟寺古文書は町の史跡にも指定されてお
り、今回は町文化財保護委員や教育委員会

やマスコミ関係者も来寺。調査を行った藤木教授は「これだけの貴重な史料が火災や戦災に遭わず残っていることは珍しい」と話していました。

この古文書調査をきっかけに、11月
じんそうじしへんさんしつ
に『仁叟寺史編纂室』が外園教授監修
の下、立ち上がりました。寺の歴史はも
ちろんのこと、地域の歴史にも新しい1
ページが開かれるのではないでしょ
うか。今後の展開が期待されます。

総代人年頭挨拶

新年に当たり謹んでご挨拶を申し上げます

檀信徒の皆様にはお揃いで良いお年をお迎えのことと存じます。お蔭様をもちまして昨年も仁叟寺は最高顧問檀家寺本欣正翁てらもと きんせい おうのご寄進により日本一の十三重石宝塔が建立されました。境内・伽藍がらんの整備なども着々と充実し、500有余年の歴史と伝統に輝くその景観は、一層の重みを感じさせています。

また、この度は早稲田大学の先生方並びに吉井町文化財保護委員の先生方のご協力により仁叟寺史の編纂に着手いたしました。今後、檀信徒の皆様におかれましても、資料の収集、その他何かとご協力を賜ることがあるかと思えます。宜しくご協力のほどお願い申し上げます。

さて、21世紀の始まりを飾るはずだったこの一年—平成13年も相変わらず政治・経済は低迷。デフレの深刻化、長びく不況、リストラによる失業者の増

大、狂牛病など問題は多く山積されております。加えて、アメリカで発生した同時多発テロ事件は世界を震撼させました。全世界を混迷と不安に陥れ、その現状は正に仏法で説く末世の様相を呈してきたと言っても過言ではありません。考えてみれば、激動と変転極まりないこの多岐亡羊とした時代に我々は生きているのです。このような時代だからこそ、私達檀信徒は精神的支柱としてすなわ きんぽうの不動の真理、即ち三寶あつ きえ(仏・法・僧)に篤く帰依し、仏の道の実践を心掛けていかなければなりません。

そのような中で唯一の明るい話題は皇太子妃・雅子様の内親王殿下のご誕生であります。今年こそ全世界の平和、経済の繁栄、夢と希望の持てる社会の構築を切願してやみません。

最後に、檀信徒の皆様のご健康とご多幸、仁叟寺の更なる発展をご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

仁叟寺総代人一同	向井周治	金子明
三木利次	森 祐夫	篠崎和男
春山繁	井上正俊	矢島正義 (敬称略)

行雲流水 (編集後記)

仁叟寺報『山雲水月』創刊号—いかがだったでしょうか。これからも、菩提寺と檀信徒をつなぐ情報紙として各季節ごとの発行を考えております。なるべく細かくそして分かりやすい寺の状況報告を紙面に反映していこうと思っております。また、寺のことだけでなく仏事に関する儀礼なども漸次、掲載していこうと考えております。なお、部数に余裕がございますので、親戚・知人などの差し上げたいという方は、ご遠慮なく申し出てください。

さて、編集後記の副題「行雲流水」。有名な禅語ですが、「行雲」と「流水」を初めて使ったのは中国ごようらんりゅうすいは宋代の大詩人・蘇軾そしよくだと言われております。蘇軾そとうはは別名蘇東坡トンポーロウと言い、中華料理で有名な「東坡肉」の発明者としても知られています。この行雲流水、日本語に訳すと、「行く雲、流れる水のごとく。」「雲や水の流れ

祈念万福多幸 吉祥如意

編集人 副任職 渡辺龍道

のようにゆったりと自由に生きてはどうですか」と世知辛い世の中を渡っている現代の人々に、禅の精神を伝えているかのようです。

また、この「行雲流水」を略すと「雲水」。禅の修行僧を表す言葉になります。私も昨年の3月末までは大本山總持寺において2年間の修行生活。早いものでもうあれから1年が経とうとしています。修行時代の初心を忘れる事無く、これからも日々精進していく所存でございます。



曹洞宗大本山總持寺大祖堂